日蓮聖人門連だより

発行
日蓮聖人門下連合会
東京都大田区池上1-32-15
〒146 電話(03)751-7181

昭和61年11月1日
第2号

日蓮聖人門下連合会結束の原点

祖廟について

日蓮聖人門下連合会理事長
長瀬貫公

日蓮聖人門下連合会が昨年、結成以来満二十五周年を迎え、京都妙顕寺に於て記念の大会を開催し、先師を追悼し、門連の今後の歩むべき道を討議し得ましたことは、誠に意義深いことであったと存じます。

二十五周年を期して、永年の懸案であった機関紙刊行も決定し、日蓮聖人門下の結束が更に強化し共通の課題、目標に向って進むことの出来ますことは洵に慶賀にたえません。

このように門下連合会の中心理念ともいうべき「祖廟」について、特に祖廟建立に至る史実、経緯、及び祖廟と御真骨の関係等について透明な認識を徹底して欲しいとの御要請に応えるべく、以下いささか記してみたいと存じます。

歴史的変遷は

祖廟建立については皆様周知の如く「いづくにて死に候とも、墓をばみのぶのさわに」(波木井殿御報)との御遺命に依り、宗祖滅後六老僧を中心として主な門下により建立され、守塔輪番制がしかれました。

その後、輪番制が必ずしも円滑に運営されず、日向上人が専任守塔沙門となって以来、今日に至るまで専任制で春秋を送ってまいりました。

(昭和四十年身延山当局は祖廟を門下各派に開放、各派の法式で輪番奉仕ができることとなった。同年四月第一回門下連合会代表による祖廟輪番奉仕が行われ今日に至っている)

身延山久遠寺第十一世行学院日朝上人(一四二二年～一五〇〇年)の御代、大英断を以って西谷の地(現祖廟)より現在の土地に諸堂宇を移転し、祖廟の整備に尽瘁されたと伝えられておりますが、この時御真骨も現在の土地に御移しし、守塔沙門としての責務を果してこられたものと考えられるのであります。

さて、門下連合会結束の原点は、連合会規約(目的)第三条に「本会は日蓮聖人の理想を実現するため、祖廟を中心として門下各派及び教団並びに地方門下連合会の連絡・協力・団結を強化することを目的とする」とあり、又(事業)第四条には「本会は前条の目的を達成するため、左の事業を行う。1、祖廟護持の組織強化」と明示されておりますとおり、「祖廟中心」こそが、宗祖滅後今日に至った門下各派結束のよりどころとして私共が意識の根底に据えるべき原点であると存じます。

門下各派の教学上の見解・分派伸張の経緯は、いずれも宗祖大聖人の御意を詮明せんとする先師の意より出でたものであることは言うまでもないことでありますが、今や物質科学中心の外道邪智熾盛の今日、立正安国の根本原理を門下が力を併せて世に唱導しなければならないと存じます。虚心坦懐に宗祖の廟前に異体同心を誓う、否、宗祖の廟前に額づくことによってのみ大同団結が可能であるといえましょう。

「祖廟中心」こそが原点

御真骨をはじめ諸堂宇を御移しした理由は、単に西谷の地が、狭隘不備というのみでなく、天変地異による災害等から御真骨、諸堂宇を格護する意味があったのであります。

即ち、日朝上人の弟子日海(一四七八年～一五一八年・海長寺十世)の「日海記」によれば〈大地震が生起し、草庵の付近一帯は荒廃し地形が変化した〉旨明記されています。

こうした自然環境に鑑み、万一の災害を考慮し、その安全を確保するための御真骨、宝蔵をはじめ、諸堂を移転、奉遷申しあげたものと推考致すのであります。

ちなみに「御真骨堂」と呼称するようになったのは第二十二世心性院日遠上人の御代で、慶長十三年(一六〇八年)にお万の方養珠夫人の外護により「宗祖真骨の宝蔵」(三間半四方)が建立されました。「身延山史」には「是れ御真骨堂建立の嚆矢なり」と記されております。

宗祖の御真骨はかくして御真骨堂に安置され、厳重に格護され、歴代法主が常随給仕申しあげて今日に至ったわけであります。

しかしながら、ここで特に明確にしておかなければならないことは、祖廟と御真骨の関係であります。

ご分骨奉安は確実

御真骨は、御真骨堂に安置され厳重に格護されて来たわけでありますが、御真骨堂に御移しする際、全御真骨を御移ししたのではなく、御分骨を西谷祖廟に御祀りし、「祖廟」としての意義をとどめ、御草庵跡と共に宗祖現在前の往時を偲ぶ聖地となしたことであります。

近年、西谷の祖廟を整備する際、当時の関係者により廟塔下に御分骨と荼毘の際の御灰が奉安されている事実が確認されております。

右の史実は祖廟に結集し、異体同心を誓う私共の信仰心に、深く記憶すべきことと存じます。

祖廟に対する尊崇、宗祖に相まみえる心地に住する信仰こそ門下連合の基本となるものであります。

近年、御真骨の祖廟奉遷の議が起りましたが、自然環境の制約等があり、未だに実現されておりません。身延山御当局に於ても専門学者による地質等の調査を行って万全の検討を加えておられますが、御真骨を永遠に安全格護する最適の地としての結論には未だ達し得られない実情と伺っております。

門下連合会としては昭和五十一年六月京都門連より御真骨奉遷実現の「懇請書」を身延山御当局に手交、更に、昭和五十三年二月、門下連合会として「御真骨奉遷に関する要望書」を松村寿顕理事長代表となって時の望月日滋法主に提出されました。

右はいずれも御門下各派が互いに分派対立した過去の歴史を超越し、聖祖のもとに融帰し奉らんとする如法な志の発露であり、共に仰ぐべき中心の聖標としての祖廟について門下一同がこぞって額づくに足る「祖廟」たらしめるよう、御真骨の速やかなる奉遷および、「祖廟」護持のあり方について身延山当局に要望したものであります。

ご奉遷をめぐる提言

ここに昭和五十三年、京都で開催された門下連合会理事会に提出された「御真骨奉遷をめぐる提言」(国柱会々長田中香浦先生執筆)という文章があります。この提言の中に

「戦後日蓮宗におかれては増田日遠師の代にすでに御奉遷の大方針を決定されたけれども、今日新しく論ぜられる御奉遷ということは過去のそれとは性格を異にし、全門下的な規模と視野のもとに行われるべきものであるという点はとくに強調されなければならない。

今日御奉遷についてその最大問題点として、さる昭和三十四年の災害の例にみられる治水上の不安があることは周知の通りである。しかしこれはたんなる技術的領域の問題であって『墓をば身延の沢に』と仰せられた聖意を忠実に体して御真骨を正しく安置した理想の祖廟たらしめるか否かという本質問題とは切りはなして考えるべきものであろう。このさい必要なことは全門下的な立場に立っての御奉遷という基本原則を確認するかどうかということである。

この御奉遷に関連して重要な問題は、とくに日蓮宗および久遠寺当局が、全御門下ならびに世のお題目教団が次第次第に祖廟を中心として結集せられつつあるというこの時代の底流について、虚心に対応されるという如法柔軟な姿勢であり、また一方門下各派にとっては互いに団結して祖廟をわれわれもまたみずからの手で格護し奉賽しお給仕申上げるというふかい覚悟を要するということである。

以上の考えのもとに御奉遷を期待するについて必要な諸点を改めて列記するならば、

㈠超宗派的に御奉遷推進委員会を組織する。

㈡全門下の総意を結集し、衆智をあつめて理想的な廟堂、廟域のプランを作成する。

㈢特に治水対策を万全にするため最高の科学技術をもってその調査を行う。

㈣二、三項の資金については各派が応分に義出する。

㈤御奉遷完了のうえはその格護と奉賽については日蓮宗および久遠寺を中心として各宗派が共同加盟して恭虔奉行の体制をしき祖廟を中心とする全門下統合の実をあげる。(以下略)」

のような指摘がありますが、誠に正鵠を射たものと思料されます。

特に重要な指摘は「聖意を体して全門下的な規模と視野のもとに御奉遷をする」という点であります。

本提言は七百遠忌を目途に報恩奉行の一環として推進すべき最重要事項として提言されたものでありましたが、遺憾ながら七百遠忌は推移し具体化に至らなかったのであります。

今や立教開宗七百五十年を十六年後に迎えるにあたり、わが門下連合会創設以来二十五年、新たな一歩をふみ出さねばなりません。

われら門下共通のみ親「祖廟」の意義をここに改めて思い起し、あるべき祖廟の姿を衆智をあつめてえがき、その実現に向って進んでまいりたいと存じている次第であります。

祝辞

一層の充実と発展を

法華宗(本門流)管長
藤田日浄

聞けば、日蓮聖人門下連合会が創立されて二十五周年を迎えるという。昨年十一月の門連京都大会では「百尺竿頭更に一歩を進め、僧俗一致以て異体同心の祖訓を体し、四海帰妙の祖願達成に一路邁進せん」の声明文が採択されたこと、誠に慶ばしいことである。

また二十五周年を記念し、門連の機関紙「門連だより」を刊行し、門下各宗団の情報を提供し合い、各宗団が在る現在を、お互いに確認し合いつつ異体同心して、宗祖の立正安国世界平和実現へ向おうというのであるから、誠に慶賀至極である。

祖願達成への門連が担う意義は重要である。その具体化へ「門連だより」創刊の辞を草しつつ思うことがひとつある。それは従来の門連への、吾が宗団の参加運営が、宗団の一部の役員によってなされており、吾が宗団組織全体参加の門連ではなかったということである。私も門連運営に参画する役員から、門連のことを時たま聞く程度であった。

従って機関紙ができ、門連の情報が宗団の末端まで流れていった時、本迹勝劣の教義を説き、宗祖の本当の御魂は身延山に無く本門八品上行所伝のお題目を説えるところに在りと説くのであるから「門連だより」を手にした方々が、身延祖廟護持、輪番制度、聖人門下各宗統合などの字句を見て、どのような反響を起すだろうかと人しれず心配するのである。

四半世紀の間、先師が門連の持つ特色を生かし、門連でなければ出来得ぬ数々の事業を敢行した功を多とし、その労を継承するに吝かではないから、日蓮聖人門下連合体の運営が一層充実発展していくための「門連だより」の発刊を慶祝し、本紙が一層門連機関紙として内容を充実されんことを祈る。(四月一日記)

シリーズ　門下御本山巡り　1

顕本法華宗総本山妙満寺

後円融天皇の綸旨を賜わり、帝都弘通という日蓮聖人の御遺志を実践された日什上人開基の妙満寺を訪ねる

「門連だより」第二号より、門連加盟の各御門流の御本山の由緒、沿革、現況等を紹介することとなった。その最初に御紹介するのが、今秋十一月六日に門連理事会を開催する会場、顕本法華宗の総本山妙満寺である。

顕本法華宗総本山妙満寺
京都市左京区岩倉幡枝町91
〒606　電話075(791)7171(代)
◎国鉄京都駅より京都バス「岩倉木野行」妙満寺前下車。
　または烏丸通経由「岩倉村松行」幡枝下車。
◎叡山電車にて出町柳より「鞍馬行」木野下車(300m)。

日什上人により開かる■

現在、洛北岩倉の地にある妙満寺は、今から五百九十七年前、康応元年（一三八九）五月の創立で、御開山は二位僧都玄妙阿闍梨日什上人である。

日什上人は、もと天台宗の学僧で、叡山三千の学頭職にあり、玄能妙化と称されていた。

郷里の会津に帰った後、日蓮大聖人の「開目抄」「如説修行抄」の二著に接し、豁然大悟し、御歳六十七歳という高齢にもかかわらず、宗を改め、自解仏乗して名を日什と改めて、日蓮門下に入られた。

しかし、当時の門下の状況は、宗祖滅後わずか百年たらずにして、宗祖の大悲願を忘れ、法理化儀悉く乱れていた。日什上人これを憂い、自ら任じて一宗の再興を企図し、宗祖の御遺志の帝都弘通にあることを想い、六十八歳の老軀をさげて都に上った。時の帝、後円融天皇に上奏、二位の僧都の位と「洛中弘法の綸旨」を賜わり、天王寺屋通妙という尊き外護者を得た。その支援により、室町六条坊門の地に草庵を構え、〝経巻相承・直受法水〟を旗印に「妙塔山妙満寺」の号を立てて根本道場とした。

妙満寺はその後、応仁の乱をはじめ、幾度かの兵火にあい、その都度洛中に寺域を変えながら興隆してきた。しかし、天文五年（一五三六）二十一坊を誇る大伽藍も、法華宗の隆盛をねたむ比叡山の僧徒による焼き打ち、即ち天文法難により、一時泉州堺に逃れた。天文十一年（一五四二）元の地に復興するも天正十一年（一五八三）豊臣秀吉の時代に、寺町二条に移転され、四百年にわたって「寺町二条の妙満寺」として親しまれるところとなった。

元治元年（一八六四）明治維新前の薩長の争い、いわゆる蛤御門の変に端を発した「どんどん焼け」の大火によって、長州屋敷のすぐ近くにあった妙満寺は、塔頭十四ヶ院と共に七堂伽藍悉く烏有に帰した。

明治以降、順次復興して、再び往時の姿を取り戻してきたが、第二次世界大戦中の強制疎開によって塔頭全部を失い、加えて周囲の喧噪日毎に増し、環境悪化は著しいものとなった。遂に昭和四十三年衆議一決して昭和の大遷堂を挙行し、昭和四十五年遷堂落慶大法要を営み、新たに現在の岩倉の清浄の地に移り、今日に至っている。

さらに、昭和四十八年仏舎利塔建立、昭和五十四年には塔頭を旧来の四ヶ院に復興し、昭和五十九年什祖廟の建立等、逐次伽藍の整備に努めてきた。

遷堂移転の苦労話■

しかし、遷堂移転を決するまでには、かなりの迂余曲折があったという。

移転前の妙満寺の寺有地は、二千八百坪余りで、京都市内の御門下各本山の中でも、寺域は広い方ではなく、それに老朽化した諸堂も目につきはじめていたという。

ましてや、市の中心部に位置するために、読経の声すら車の騒音にかき消されるような、宗教的環境の維持が困難な状況下、郊外移転の青写真が描かれていった。

幸いに、寺町二条の妙満寺は、市役所の隣りにあり、当時市内でも一等地といわれるところにあった。

市当局にも消防局を建てる計画があり、市行政も膨張気味で、いずれは庁舎を増築しなければならないといった状況もあり、財政難をおして寺域譲渡の運びとなったという。

昭和四十一年九月のことであった。

代換地は、国立京都国際会館を建設する時に土砂を採取した、現岩倉幡枝の雑木林跡地に決まった。

周囲にはまだ民家がまばらにあるだけで、交通の便も、京都バスが京都駅前から一時間に一便ほど発車するのみだった。走行すること約四十五分、深泥ヶ池を巡り、峠を越えると、景色は一変し、眼前に田畑も広がるまさに郊外であったという。

一宗の総本山として、信仰の中心道場として、自然に抱かれ、東方に霊峰比叡山、北方に鞍馬山系、西、南方にも小高い山々を臨む風光明媚な岩倉の地は、新本山として蘇るにふさわしい絶好の環境といえた。

しかし、土地所有者の方々との買収交渉も難航した。土地所有者は一人でなく、岩倉木野・賀茂に住む十八人もの農家の人々だった。

農家の人たちの土地に対する愛着には、非常に強いものがあり、交渉役の本山総務さんはじめ、再建委員の方々も腰をすえて一人一人説得して回り、ようやく見通しがついたのは、交渉開始から一年程経ってからだった。一宗門の根本道場である総本山の再建という趣旨と熱意が理解され、先祖伝来の土地を快く妙満寺に解放してくれたのであった。

さらに、諸堂の移築等、殊に墓地移転は、より一層の手間と精密さを必要とした。

以前より四倍の広さになった寺有地には、十三間四面の本堂（旧本堂は十間四面）が一部新築で建立され、祖師堂、書院、客殿、宗務所と順次移築が進み、新たに信徒の宿泊所、研修道場を兼ねた信行道場も建築され、さらには、十五メートル四方の納骨堂つき仏舎利塔も建てられ、ようやく妙満寺の新しい全容が整ったのであった。

名園〈雪の庭〉■

ちなみに、山内には俳句の祖と仰がれる松永貞徳の造営せる「雪の庭」（本坊の庭で、もと塔頭成就院の庭である）があり、清水寺の「月の庭」北野の「花の庭」、そのいずれもが成就院という坊の庭であったことから、三成就院の雪月花の三名園として並び称された。ただし、花の庭は現存しない。

当初より比叡の峰を借景にとり入れて造園され、観雪の眺望が最も美しく趣があり、それが雪の庭と称される由縁でもある。

観雪の眺望が最も美しく趣がある「雪の庭」

また、昭和四十八年建立された仏舎利大塔は、釈迦牟尼仏が成道をされた聖地、インド・ブッダガヤに、西紀前二百年頃、アショカ王が建てた供養塔を模したものである。

仏舎利大塔■

霊鐘安珍・清姫の鐘■

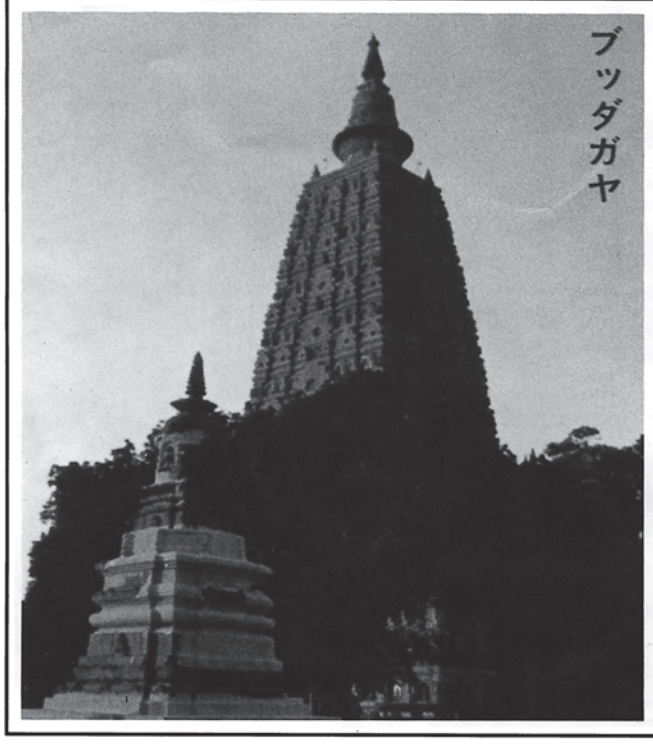
そして、異色な重宝として所蔵しているのが、「鐘に怨みは数々ござる」で有名な紀州道成寺の鐘である。この鐘の霊話は、長唄、歌舞伎、日舞等あらゆる芸能に取り入れられているが、幾多のエピソードを秘めて妙満寺に伝えられていることは、あまり世間に広く知られていない。道成寺を演ずる芸能人には、この鐘に芸道精進を祈る者も多いという。

また、例年四月十二日、鐘供養法要を営み、安珍清姫の霊をなぐさめている。

それ以外にも、宗祖御真筆御曼荼羅をはじめ、什祖御真筆並びに歴代先師の遺筆も多数格護されており、雪の庭の作者である松永貞徳の肖像画や、土佐派の中興といわれる土佐光則画加藤清正公の肖像画等も所蔵されている。

年中行事■

また年中行事は、年頭祈願会（国禱会）に始まり、御開山会(二月二十八日)、立教開宗会(四月二十八日)、春季大法要(四月十二、十三日)、御会式(十月十三日)等がある。年間を通して、盆、彼岸行事、釈尊聖日、宗祖聖日(御法難会)等の御報恩法要並びに毎月例会を通じた信徒との交流を図り、信行増進に励んでいる。



テーマのある旅をもとめて

21世紀へ 豊かさを深める――とうきゅうグループ

東急観光は、皆さまの身近な旅のコンサルタント。

さまざまなカタチをかえてひろがる旅の需要にあらゆる輸送機関、宿泊施設の予約、手配をはじめ、コースのご相談、旅行プランのいろいろなど幅広いサービスをご提供して、数えきれないほどの人びとに確かなご満足をいただいております。

団体参拝、仏蹟巡拝、慰霊、交流使節、研修、大会、会議、奉仕の旅は最寄りの支店、営業所にご用命ください。

TOKYU TOURIST　贈ります、あなたの心にのこる旅――
東急観光

運輸大臣登録一般第38号
本社　〒150 東京都渋谷区渋谷1-16-14
TEL 03 (407) 4044

シリーズ 門連の進路をさぐる 1

争論をさけ、立脚点のレベルアップを

日蓮聖人門下連合会相談役
顕本法華宗前宗務総長　古瀬堅徳

七百遠忌を節目として

戦後、門下先師の方々の努力によって門連が発足し、それぞれの宗派教団によって教義、伝統、宗風の相異はあるものの、大きく法華経と日蓮大聖人の教えを信奉するという共通の基点から、「祖廟中心」を第一義として相互に理解を深め、結束を固め、組織の充実拡大をはかりつつ前進している時、たまたま大聖人の第七百遠忌を迎え、門連として御報恩の為種々の企画をたてて実行した。

しかし七百遠忌が終ってみると、祖廟中心という第一義の根本理念について、更に深く詳しく会員相互の論議を尽して解明し、そこから出てくる門連の今後のあり方についての具体的方法をうち立ててゆくという、第二段階追求の作業が必要な時期に直面していた。その作業の前で最も慎重を要求されたのは、論議をつくすという事が、過去の門下の歴史にみるように、各教団が「宗我」にとらわれた法論に突入し、感情的な対立や分裂になってはならないという心配で、これは誰もが心中深くもっていた。

組織にとって平穏と融和の大切な事は勿論である。しかし、真剣に考えるべき最も大事な問題点をさけて、殊更に無事安穏の道だけを選んでいては、過去の惰性の中にのみ停滞していて、無難ではあっても激動する時代に対しての門連の新しい前途はきり拓かれないままである。〝広く会議をおこす〟という姿勢も時には最も大切である。

門連第二段階へ

各宗派教団の教義・宗風・伝統はそれぞれ長い歴史をへて今日あるので、一々についてみれば何れも深い意味と由来がある。これを今急にとりあげて議論をつみ重ねてみても、争論岐れになるのがおちである。今この問題に拙速な結論を出す時ではないし、その必要もない。

もっと立脚点を大きく高くふまえて、門連の根本理念である、法華経思想の宇宙的世界観の中での展開、大聖人のお題目南無妙法蓮華経の教えの人類的展開、という点に力を結集してゆく事が、門連第二段階への前進の為、目下の急務ではないかと思う。

「宗我」を捨てる

それにはまず第一に、各々が独立している宗派教団の集合体であるから、決して多数決の原理だけを単純無条件に適用してはならない。平穏親睦の為の集合体で特に目的に向っての急激な行動を必要としない場合は、多数決の原理は自然でもあり、無難であって意義もある。この点は深慮と英知を要する所である。

一例として、全日仏をみれば判るように、形骸は整っていても、動員力も結集した実行力も少なく、従って有機体としての活発な動きはあまり出来ないような状態になる。

第二に、自己中心に、自らの教団誇示の小さな「宗我」をお互いの心中から消去する心がまえを持つ事である。宗派の為だけの自己優先の主張は、結局門連というコップの中だけの近視眼的布教に沈淪してゆく。つまり各教団の先師達が、尊い生命をかけて遺して下さった信徒や教団的地盤の中だけの動きに帰してしまう。

根本理念としての目的達成の対告衆は、今や全人類であり、現にわれらの眼前において日々さまざまの歴史をつくりつつある地球的規模における大衆である。それに尺度をあわせなければ、一天四海の大衆への焦点はぼけてしまう。先師から受けついだ信徒の人々や其の他の教団的地盤を大切な基点として、それより何百万倍もある法華経にまだ縁を結んでいない末法の大衆に向っての姿勢を忘れてはならない。

門連の発展を念じつつ、自ら省みて自身への提案である。

門連京都理事会予告

十一月六日妙満寺に開催

毎年恒例の日蓮聖人門下連合会京都理事会が、今年も十一月六日(木)午後一時より開催される。

会場は各派持ち廻りでえらばれているが、本年は顕本法華宗が担当。したがって同派の総本山妙満寺である。

理事会終了後、席をうつして行われる懇親会は、京都門連のメンバー各師の心づくしにより、毎年大いに盛りあがり門下交流の実をあげている。今回も左京区宝ヶ池の国立京都国際会館において開かれる。

当日、本会相談役古瀬堅徳師の記念講演も予定されている。

昭和六十一年度 身延理事会開かる

祖廟参詣・多大の成果をおさめる

恒例の日蓮聖人門下連合会身延参詣・理事会は去る昭和六十一年五月十四日奉行され、多大の成果をおさめた。

門下各派代表一行十九名は、あいにくの雨天であったが、長瀬貫公理事長先頭にて祖廟奉仕所出発、唱題しつつ参進。

まず御草庵跡で法味言上、次に祖廟に進み法味言上、各派代表が焼香し、異体同心の誓いを新たにした。

記念撮影の後、大本堂にて法味言上、宝物館拝観、祖師堂巡拝、御真骨堂にて法味言上を行ない、水鳴楼に於て岩間日勇法主の御挨拶をうけて、新書院にて昼食。

午後二時よりいよいよ開議。まず自己紹介が行なわれ、長瀬理事長を座長に選出、議題に従って議事を進め、それぞれ報告・承認・決定を行ない午後四時散会した。尚、夕刻より下部ホテルに会場を移し懇親の会がもたれた。

当日の主な報告・承認・決定事項は左の通り。

1、昭和六十年度会務報告
①祖廟参詣・理事会　六月二十五日　参加十九名。
②京都拡大理事会　十一月二十一日　妙顕寺　参加六十四名　門連結成二十五周年に当り遷化三十二先師追悼会厳修。
③機関紙「日蓮聖人門連だより」創刊、四月二十八日。

2、昭和六十年度決算報告とその承認。

3、昭和六十一年度予算案の件、承認。

4、門連規約改正の件。各派管長及び同相当職にある者を門連顧問とする件、全員賛成にて可決決定。
(旧)第十条　本会に理事会の推薦により顧問若干人を置くことができる。
(新)第十条　顧問は各派管長、同相当職にある者が就任するほか、理事会の推薦により若干名を置くことができる。

5、門下連合会活動の方向について。
右については、①地方門連との連携、現状把握等について「門連だより」を仲立ちとして活用したらどうか。
②身延山に門祖の墓を建立する件は各派の意向が統一されず保留とする。
③御真骨奉遷問題について。
④叡山開創一二〇〇年各宗法要に門連として参加する件。
以上について討議された。

最後に、京都理事会開催日を十一月六日とすることを確認した。

田中智学著
田中智学自伝 全10巻　三二、〇〇〇円
日本国体の研究　八、〇〇〇円

田中香浦著
田中智学(評伝)　一、四〇〇円
これからの世界・人間　一、三〇〇円
日蓮聖人の宗教　九八〇円
日蓮主義の研究　二、〇〇〇円
正しい宗教のすすめ　五八〇円
蘇れ、日本。　一、五〇〇円

日蓮主義研究〈第10号〉　八〇〇円
日蓮聖人理解のための覚書●田中香浦
明治知識人の見た日蓮●津田剛
立正安国論管見(その四)●伊藤瑞叡
※第2号～9号の在庫あります。

〈真世界運動〉機関誌
月刊 真世界(年間講読料三、六〇〇円)　三〇〇円

宗教法人 国柱会 真世界社
出版部　東京都江戸川区一之江6-19-18
〒132 ☎(03)656-7111
郵便振替 東京5-19556

日蓮宗新聞社の本

さだるま新書
●本弟子六人(六老僧)の信仰の姿を描く
1 日蓮聖人のお弟子たち―六老僧略伝―　宮崎英修 著　定価六八〇円
●ご遺文から三十一の章句を選び解説
2 日蓮聖人のお言葉―一日一訓―　渡辺宝陽 著　定価六八〇円
●生きる指針と希望をあたえる話
3 今を生きる―珠玉の三分間九十九話―　日蓮宗護法伝道部　定価七八〇円
●妙法蓮華経漢訳のいきさつ
4 「妙法蓮華経」の生いたち―鳩摩羅什三蔵について―　野村耀昌 著　定価六八〇円
●すべての女性と子供に贈る愛の物語
5 愛のハーリティー―鬼子母神の物語―　大嶋忠雄 著　定価六八〇円

(好評新刊)
かまくらの草花―四季の寺々をたずねて―　B6判／一五五頁／定価九八〇円
マンガ にちれんさま　定価五〇〇円
劇画 日親上人　定価六八〇円
※全国どの書店でもお求めになれます。
お問い合わせ 日蓮宗新聞社 TEL(03)755-5271

各派・教団 短信

【法華宗(本門流)】❀同宗では管長及び内局の進退に伴い、門連役員に変更があった（カッコ内は日付）。

管長　顧問　赤田日崇(7・8新任)
総長　常任理事松井孝純(1・8再)
理事　渡辺修翁(1・8新任)
理事　中村宏龍(1・8新任)

❀同宗の布教機関誌『無上道』が本年6月号を以て、発刊38年第450号を迎えた。発行人の松井総長は「日蓮大聖人の正統たる法華宗の信仰弘通を願う宗徒は、本誌に大きな期待を寄せている。一層の面目躍如たらん日の早からんことを」と語り、〝お話しもっと。心で読もう、心を語ろう〟をテーマに読者倍増推進運動を展開中。（矢吹慈英）

【国柱会】❀本部主催少年少女夏期学校は、8月2日から5日まで申孝園(国柱会本部所在地)に行われた。今年で34回目である。東京の他、近畿、九州でも開かれた。

❀聖地池上にて10月12日お会式の当日恒例の屋外宣伝が行われた。池上宣伝は大正8年から続けられている。

❀身延祖廟輪番常勤給仕(前号参照)は今年22回を迎え、11月22日から24日まで、祖廟まじかに昼夜不断の唱題給仕が奉行される。（秋場善弥）

【本門法華宗】❀昭和61年2月26日付き宗会にて、増田宏雄総長辞任により、吉村信尚氏（大阪大願寺）が新たに総長に選定され、同時に新内局も発足した。宗会議長には中村重信氏（大阪法華寺）が選定された。

❀教学部では10月27日より3日間、教学講習会を鹿児島県種子島、屋久島にて開催。参加者は50余名、種子島は一四六三年に宗源院日典上人が弘通し、法難殉死された霊地、不自惜身命の布教を偲び、ご遺徳にふれて、今後の布教の一助とし、500年に及ぶ法華の島々の歴史、今日的宗教事情を学ぶことが目的。（持地優学）

【法華宗真門流】❀総本山本隆寺の本堂と祖師堂が、去る昭和61年3月22日京都府の重要文化財に指定された。6月21日に開催された教学講習会の席上、関西大学教授永井規男氏より「本隆寺の本堂及び祖師堂の文化財指定について」の記念講演があった。

❀来る昭和63年は、総本山本隆寺開創五百年に当り、先達の努力と祈りによって護られた本堂・祖師堂に象徴される本隆寺の信仰のともしびを一層発展させなければならないとの決意を新たに僧俗一体となって「本隆寺開創五百年記念慶讃事業」を進めている。（吉田勝秀）

【日蓮本宗】❀本宗では、昨年11月7日嗣法五十祖高見日運猊下御遷化のあと、しばらく四十九祖原日認猊下の管長代務の状態であったが、この度、大学頭に嘉儀裕乗師が推挙され、去る7月28日大学頭相承式並びに仮入山式が挙行された。また宗政・山務当局の任免がなされ、前宗務総長太田奠壌師がご退任になり、新たに住友顕一師が宗務総長に、総務部長兼教学部長に今村要道師、財務部長に丹治義順師がご就任され、本堂大屋根修復工事に全力を傾けることとなった。なお五十一祖嘉儀日有猊下の晋山式は、明年5月8日の御開山会に奉修される。（柳下義真）

【顕本法華宗】❀10月8・9日の両日、総本山妙満寺を会場に、布教師会主催による全国布教師研修会が開催され、日頃懸案の布教課題や現代社会から派生してくる諸問題等について研究討議がなされた。

❀10月12日、本年、住職を拝命した新任住職が檀家総代を伴って、仏祖三宝並びに御開山日什上人、御歴代先師に対し什祖の教風を体して、専一教化伝道し精進することを、妙満寺御宝前にて誓願する奉誓式が厳粛に奉行された。式後、吉田日康管長猊下より訓戒のお言葉が新任住職に伝えられた。（朝倉俊幸）

【本門佛立宗】❀本年3月末の第116回定例宗会にて、任期満了にともなう次期講有推戴選挙が行われ、現講有・仏立第十八世・西村日地上人が再選された。就任式は来る11月8日に、京都西陣の本山宥清寺本堂に於て行われる。

❀二期目に入る西村講有のもと佛立宗では、来る昭和64年に迎える「佛立開導日扇聖人百回御遠諱」に向かって大きく飛躍しようと、各種の事業を準備企画し進めている。

❀開導百回御遠諱・報恩御奉公の第一弾として「佛立文化講演会」を開催することに決定。その第一回が神津善行氏を迎えて8月に静岡で、第二回は鈴木健二氏を迎え9月に函館で開催。いずれも満員の盛況であった。引き続き明年度初頭から64年にかけて、全国22の布教区で次々と開催していくとの事。（深沢泉奥）

【法華宗陣門流】❀昭和61年度宗内各教師の中央行学講習会が、去る9月9日、10日両日に亘り、約120名の参加者のもと、和歌山「萬波ホテル」に於いて開催された。

第1日目は、開講式に引き続いて、法華宗布教研究所、所長本宮日顕先生によって、「富山藩合寺の提要と日讃派の対応」と題して講義された。第二講は、日蓮教学研究所、所長浅井円道先生が昨年の講義の続き「四箇格言続講」と題して講話をされた。第2日目は、本宗の和歌山久成寺、又日蓮聖人遊学の地、高野山五坊寂静院を参拝して2日間の講習会を終了した。（江坂隆俊）

【日蓮宗】❀長瀬宗務内局初の定期宗会（3月11日～14日）では、昭和60年9月発せられた管長教旨の趣旨をふまえ「お題目総弘通運動」の徹底、特に十六年後の二〇〇二年に迎える立教開宗七百五十年に向って宗内活性化をはかる方針が施政方針として示された。

特に「宗門機構の整備充実」「教育体系の強化確立」「布教体制の樹立」「宗門財政の整備」を四つの柱として重点施策に取り組む決意が表明された。

❀いずれも宗内発展の重要な側面であるが60年度より施行された勧学院制度は宗門発展の基盤たる教学の振興、教師の教学研修を目ざす新たな教育制度として積極的な推進がはかられる方針である。

61年度は中央教学研修会をはじめ各地方六教区で教学研修会が開催された。

❀「宗門機構の整備」の面では審査会規程の全面改正が行われ、新たに紛議を和解調停する「調停委員会」が設置された。本年は宗務院機構の見直しにも着手検討中。

❀「布教体制の樹立」の一環として「布教拠点確保援助規程」が制定され、新たに布教拠点を設置する場合宗門が担保を提供し、二〇〇万円を限度として三年間返済無利子とする制度が施行された。

❀立正大学学園は4月1日仏教学部長渡辺宝陽師を学長に選出した。後任の学部長には佐々木孝憲師が就任。

大崎再開発構想、勧募計画の具体化がはかられている。

❀第6次日蓮宗中国訪問使節団は、去る9月2日～13日に至る12日間北京、西安、天台山などを訪問、羅什三蔵の草堂寺顕彰、天台山の題目宝塔開眼法要を岩間日勇法主が督された。

❀本年度宗務院では教務部で60年度よりカリキュラム委員会に諮りつつ編集の『檀信徒教化読本』を刊行、全寺院に配布した。

❀日蓮宗保育連盟では伝道部と共に編集を進めていた『日蓮宗幼児教育読本』を7月15日刊行した。

❀青年の船企画準備委員会が10月30日宗務院で開催され、具体的実施方策が検討される。（富川孝恭）

【日本山妙法寺大僧伽】❀日本山妙法寺藤井日達猊下御本葬儀が、去る60年5月28日、日本武道館で厳修された。門連から長瀬理事長参列弔意を表した。

本紙編集委員自己紹介(1)

富川　孝恭（日蓮宗・編集長）

このたび門下連合会機関紙門連だよりが創刊され、各派より推薦された編集委員により編集業務が行われることとなりました。

特に紙面の構成につきましては、門連常任理事会との密接な連携の下に、①本会創立以来培った共通の場を活かし、門下が等しくかかえる諸問題を考える場の提供。②本会活動の報道、を基本路線として参りたいと存じます。

基本路線①にそって、例えば布教伝道の側面から門下各派が共通して採用できる基礎情報であるとか、各派檀林・本山等教育機関の紹介、又教団の組織論、更に社会への視点として新新宗教の実体、一般社会の動向、世界情報などさまざまな課題があると思います。

基本路線②にそって考えますと、門連活動、各派教団の動向、(機関紙・誌の紹介、人事)等々情報の提供が可能であります。が、要は本紙が、要は本会の潤滑油としてその役割を果し得るよう編集委員一同努力を傾注して参りたいと存じます。

何卒御叱正、御鞭韃の程お願いいたします。

柳下　義真（日蓮本宗）

此度、本宗を代表して「門連だより」の編集委員の委嘱を賜わりました。微力ながらお受けした次第、他の編集委員各位のご指導をいただき、協力していきたいと考えております。

ところで、この新聞の読者層が、当面は門連関与の方々、各教団の役職者、宗会議員の方々等に限定されておりますが、聖祖門下全体からみると、門連とは如何なる機関であるかという認識をどのくらいの人がもっておられるかを考えた時、将来的には各教団の末寺寺院全てに配布され、一人でも多くの人に読まれることが望ましいと考えます。その中で各教団、特に末寺の抱えている諸問題についての投稿を呼びかけ、共通の課題として取り上げられる問題なら、それをテーマにした講演会等を企画して、共に考える場を設けてはどうでしょうか。

この機関紙が、その他多くの諸問題に果たす役割の大きさを考えますと、編集委員の責任の重大さを痛感するものであります。

秋場　善弥（国柱会）

日蓮聖人七百遠忌報恩記念事業の大きな柱として「青年の船」は大事業であった。すべてが初めての経験で、五十四年秋から実施の五十七年三月までの期間は、実に真剣な協議がなされた。企画が固まり万全の準備がなされ御門下青年五百人が乗船して、めでたく出航、諸縁吉祥裡に成満されたが、あの時の意気ごみ、感激を忘れずに、これからも努力していきたいものである。

私は東京下谷に生れ、戦災にあって疎開先の山形県尾花沢で、夏は山野を馳けめぐり冬は雪の中で成長した野人である。学問もなく能力もとぼしいが、日蓮聖人は末法の大導師であられ、聖人の宗教は末法世界を救う唯一の教えである、という信念信仰は固く持っている。

すでに三児の父、青年ともいえないが、常に若さいっぱい、「一天四海皆帰妙法」をめざして、およばずながら勇猛精進していきたい。

朝倉　俊幸（顕本法華宗）

去年の二十五周年大会にて、創立以来種々の活動と事業が積み重ねられてきた足跡に思いをいたし、大きな成果を認め合うことができました。

今日の門下連合会の現状を見る時、各派の大同団結の道をさぐり、連帯協力の輪を広げるという初期の目的は、一歩も二歩も前進したのではと感ずる方も多いかと存じます。

私も本紙の創刊に際し、編集委員の一人として参加させて頂くことになりましたが、本紙の果す役割をふまえつつ、門下連合会活動基本理念を再認識していきたく存じます。

幸いに、宗祖七百遠忌共同事業の「門下青年の船」運営に関与された旧知各師と再度交流させて頂けることは大いに心強く、喜ばしい限りです。

持地　優学（本門法華宗）

私が生まれましたところは、日蓮聖人が身延を離れられ、九月十四日に投宿された竹之下の近郷、霊峰富士山の麓です。

このたび「門連だより」編集委員のお役を頂き、微力ながら務めさせていただきます。（次号につづく）

日蓮聖人門下連合会

●目的

本会は日蓮聖人の理想を実現するため、祖廟を中心として門下各派及び教団並びに地方門下連合会の連絡、協力、団結を強化することを目的とする。

●事業

本会は前条の目的を達成するため、左の事業を行う。

1、祖廟護持の組織強化
2、教育事業の提携
3、布教の連合教化
4、懇談会・研究会・講演会等の開催
5、各種出版物の刊行
6、海外布教の提携及び交流
7、対外的な各種の運動
8、その他

●加盟団体

日蓮宗　法華宗本門流
顕本法華宗　法華宗陣門流
本門佛立宗　日蓮本宗
法華宗真門流　本門法華宗
国柱会　日本山妙法寺
京都門下連合会

るつうぶん

＊本紙第二号をお届けする。紙面構成・内容すべてまだ不満足であるが、創刊号をうけいささかの成果も反映させることができた。

＊一面の長瀬理事長論文は、門連存在の根本理念、原点たる祖廟についての所信を表明されたものである。祖廟がもつ問題は複雑さが無しとしないが、信仰的全門下レベルで解決を願いたい。

＊今号から新連載が始まった。各派本山巡り、門連の進路、実のある内容に育ててゆきたい。

＊本紙編集委員の自己紹介をかね、ご挨拶を申し上げた。しっかりやります。乞ご声援。

＊最後に、活字が大きくなりました。（事務局）